

国宝浄瑠璃寺三重塔初重内部彩色剥落どめ

受託研究報告第24号

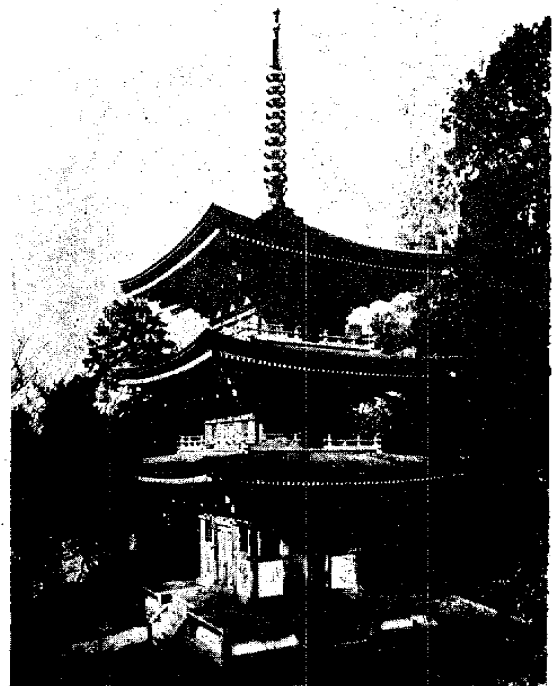
茂木 曙・立田 三朗

1. はじめに

浄瑠璃寺は、京都府加茂町にあり、治承2年(1178)に京都一条大宮から移築されたと伝えられる。国宝三重塔は、境内の池を狭んで阿弥陀堂と向き合って建っている。

初重内部彩色の剥離剥落が甚だしいため、合成樹脂による剥落どめを、昭和42年度保存科学部受託研究として行なった。処置の対象となった彩色部の総面積は35.5 cm²である。

この保存処置は、化学研究室(岩崎友吉室長、樋口清治技官)の協力を得て、修理技術研究室(立田三朗室長、中田寿克技官、茂木 曙技官)が主に実施した。実施にあたっては現地修理事務所(下村修主任)の便宜を得たことを感謝する。



全姿 解体修理後

2. 処置前の状況

三重塔重内部全体に描かれている彩色については、別途に昭和35年春当研究所美術部が詳細な調査をされているが、現存する彩色は創建当初のものばかりとは言えぬようである*。しかし全体の傾向として顔料層が胡粉下地層とともに、老化が比較的粉状に脆弱化しているため、剥落どめに際しての合成樹脂の滲透は良好と判断した。

(1) 天井は折上げ小組格天井で彩色はかなり良く残っていた。しかし顔料は胡粉下地と共に木の素地からの剥離が目立っていた。

(2) 軸部の彩色は、やや厚手の漆下地の上に描かれていて、下地からの緩みは少なく彩色層そのものの浮上りが認められた。

* 末発表

(3) 隅柱の彩色は各種の楽器、宝樹、鳥、宝相華などで、かなり鮮明に残っている。嵌板の十六面には、十六羅漢の図像が木地に胡粉下地を施してから描かれている。しかしその殆んどが剝落し羅漢の人物像が目立って残っているものが多い。この嵌板の矧目には木屎や布貼りが施されているが剝離しているものが多い。

(4) 扉の3枚は釈迦八相図と言われるがその殆んどが剝落して極く僅かに点在する彩色と痕跡によって図様を想像し得る程度である。なお手の届く範囲に多いが、陶器の破片のようなもので顔料を掻き落したと思われる無数の傷がついている。

3. 保存処置

実施にあたり合成樹脂は知恩院経蔵内部彩色剝落どめ処置¹⁾で経験ずみの、化学研究室で用意されたアクリルエマルジョン 20%溶液と、P. V. A 6%溶液を等量に混合したものを原液とした。原液は濃厚であるので実施にあたっては原液を水でうすめて、この2種類各々の合成樹脂溶液と水との容積比が1:1:1を1号液、1:1:2を2号液、1:1:3を3号液として使用した。そして対象の顔料や下地の種類、剝離の程度に応じて使いわけた。

(1) 天井の格天井の部分は一部を除いては殆んど無理なく降ろせる状態であったので、降ろす際の微震動によって剝落しそうな顔料層や、胡粉下地層に対して、2号液を含ませた筆の穂先で押上げるようにして木地に密着させてから小組天井を降ろし、上向きに置いた。同樹脂液の含滲、濾紙を用いての圧着で処置した。格縁、支輪及び支輪板の彩色も天井同様に薄手の胡粉下地もろとも剝離しているものが多く、処置は天井に準じた。しかし支輪板は外せるものが殆んどなく、そのままの状態を実施した。

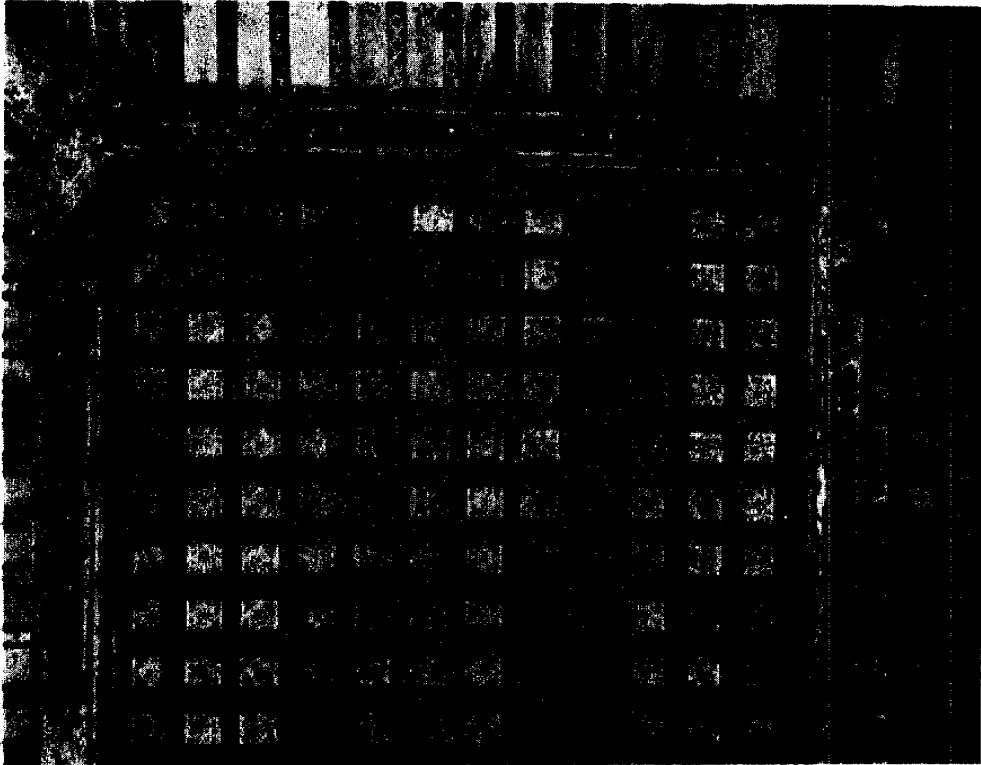
(2) 台輪、長押、隅柱及び中柱等の軸部は前述のように漆下地の上に彩色が施されており、床に近い程、剝落がひどく下地の地色が露出していた。残存彩色の浮上りは、1号及び2号液の含滲及び濾紙をあてての圧着でよく安定した。白緑部分の剝離が多く処置に際して碎け易いので特に注意を要した。漆下地が木の素地からの剝離は僅少乍ら認められた。これには、開口部を利用して注射器で原液又は1号液を剝離部分に注入して吸取紙を当てて押さえた。

(3) 十六羅漢の嵌板は、板壁の胡粉下地ごと剝落してしまったところが非常に多い。羅漢像の部分が比較的良く残り周囲は木の素地の肌が露出している。彩色の残存部は2号液で処置し、周囲は3号液を吹きつけてほかし、くまの出来るのを防いだ。板の矧目の木屎の崩れや、布貼りの剝がれに対しては、1号液で個々に強度を持たせてから、原液を使ったり、ペースト状の酢酸ビニール樹脂で、木地に固定した。

(4) 扉は東側の2枚の上部に色紙型にそれぞれ1箇所ずつ鮮明な彩色が残っている以外は、厚手の漆下地層の肌が露出し、無数に入った亀裂から剝離、剝落していた。1号液で下地層の部分を固め、2号液で彩色部分の剝落どめ処置を施した。

文 献

- 1) 茂木 曙 知恩院経蔵内部彩色剝落どめ処置 受託研究報告第20号 保存科学5号 p49 (S44.3)



格天井彩色 (処置後)



内部彩色の状態(処置後)



軸部彩色(柱上部組もの)処置後

Résumé

Akira MOGI and Saburō TATSUTA: Treatment for Prevention of Exfoliation of Paintings in the Interior of the Ground Floor of the Three-storied Pagoda, Jōruri-ji Temple

This three-storied pagoda is at the Jōruri-ji Temple at Kamo-machi, Kyoto-fu. It is said to have been transferred here from the city of Kyoto during the 11th century. The date of its original construction is unknown.

The interior of its ground floor is decorated all over with Sixteen Arhats, Eight Aspects of the Buddha's Life, floral patterns and other motives, which are painted in color on wood. The coloring had badly exfoliated or floated from the base. We gave it a preventive treatment with a mixture of equal amounts of 20% acrylic emulsion and 6% p. V. A. solution. We diluted this mixture appropriately with water, because it is too viscous for treatment. We used brushes, syringes and blotting paper for the treatment.